『浜松中納言物語』主人公の唐后思慕と〈ゆかり〉への援助の必然性小考

――巻三の吉野山初訪問時における心情「もし世におはすることもこそとて、言づけ給ふもの……」の解釈を中心に――

松浦　あゆみ

平安時代後期の渡唐物語『浜松中納言物語』（以下、本作品と称する）では、主人公中納言の唐后思慕が、渡唐時だけでなく、帰国後は逢えない苦悩のうちに唐后の転生予示の結末へと向かう過程として、唐后の〈ゆかり〉異父妹吉野姫君のあり方が従来論じられてきた。

吉野姫君は、中納言渡唐中の巻一ではその存在に一切触れられない。初めて言及されるのは中納言が言付かってきた唐后の手紙を帰国後開封して読む際、巻二末近くに至ってからであることから、執筆上の構想の変化が論じられ、また、孝養に関する仏の導きの下、吉野姫君の将来に関しての予言が彼女に対する中納言の心情を先導する傾向として論じられてもいる(1)。その一方で、近年は主人公の欲求・言動を正当化する役割が指摘されている(2)。ただし、各部分の主人公の具体的な心情の詳細に関しては今後さらに追求する必要があろう。

本稿では、主人公中納言が唐土から帰国した約半年後、巻三前半の吉野山訪問一回目において唐后に関し回想する難解箇所（以下、当該箇所と称する）の解釈を検討することを通じ、ささやかではあるが、唐后思慕を抱きつつ彼女の異父妹姫君への援助に至る主人公の心情のあり方について、援助の必然性との兼ね合いを示してみたい。

なお、最初に本稿の出発点と論述姿勢を明記しておく。作品の当該箇所の解釈としては既に本誌において、本作品の注釈会により作成の注釈（以下〈巻三注釈〉）(3)で注釈会員と共同で検討した結論を示しているが、語句「もこそ」「あてはかなり」の解釈が問題となる点が多いため改めて論拠を示しつつこの〈巻三注釈〉の結論を更に補訂する。

一、巻三の吉野山初訪問時の中納言が回想する唐后の〈言伝け〉における解釈の問題点確認

中納言が、在唐時に唐后から預かった手紙をその母吉野尼君に渡し直接対面も果たしたのは、巻三初め近く、尼君の隠棲先である吉野山訪問一回目であった。后の母の消息を知る近住の吉野聖は、唐后の手紙の取り次ぎをする際に、中納言に対しこの吉野尼君の身の上について、巻一において地の文で語られた父宮の流罪に伴う筑紫下向という苦難に満ちた生い立ちに加え、唐土からの使であった夫（秦の親王）の帰国時に娘唐后が連れられて渡唐した後に上京し帥宮が通うという数奇な人生を送るに至ったいきさつも語り聞かせる。帥宮との不本意な逢瀬により世を厭って彼女が出家した後に、后の異父妹吉野姫君を出産した事情を語ったのは、この時のことである。中納言は巻二末近くで唐后の手紙を開封した時に吉野姫君の存在を知っていたが、巻三初めに吉野山を来訪してこの吉野聖の説明により詳しいいきさつを知ったのだった。

本作品の諸注で解釈の違いを生じている当該箇所は、中納言がこうした事情を吉野聖から聞いた上で近くに住む吉

野尼君と感動の対面を果たした直後の時点にあたる。深吉野（みよしの）の荒涼とした景を改めて実感し、戻った僧房で吉野聖から唐后の異父妹吉野姫君が母吉野尼君と同居していることを知らされた時の、地の文を交えた心情描写である。問題部分における諸注の解釈の違いを作品本文の上で示すのに先立ち、その直前の文意を記しておこう。

文①：この深吉野は嘆きのあまり隠棲する人つまり吉野尼君のような人はお住みになるだろうが、年若の娘吉野姫君には恐ろしさを感じる所であることよ。

文②：年若の娘吉野姫君がこのような深吉野に住むとは、昔物語に聞くような、稀で胸に迫ることだ。

文③：かけがえのない唐后の「御ゆかり」だと思うにつけても、涙ぐまれて、中納言は吉野尼君・姫君母娘の住まいをそのままにして帰る気にはなりなさらない。

こうした文①・②・③、吉野尼君・姫君母娘の深吉野住まいの実感を述懐した後に続く文④・⑤・⑥の三文が、問題となる箇所である。最後の文⑥において後半「聖には……」以降は、中納言が吉野聖にしばらくの間この深吉野に滞在すると告げて、「御文ども」つまり京の母君・義父左大将の夫妻及び剃髪の身ながら日常生活で最も尊重する相手大将大君への手紙を送った内容である。だが、それ以前A～Eの記号を付した各部分では諸注―新註・旧大系・桜楓・新編全集・全注釈[4]―で解釈が分かれている。

作品本文の引用（＝当該箇所）に続き、このうちの文④・⑤・⑥におけるA～E各部分の解釈について本稿の結論（巻三注釈）との違いも含む）と諸注での見解を示しておこう。

①身をなげきに思したる人こそあらめ、若からむ人の住まひには、いと恐ろしき所なりし。②昔物語などにこそ、かかることは聞け、めづらかにあはれなることをも見聞くかな。③ただ人一人の御ゆかりに、涙もろになりて、かかる御住まひを見置きて、立ち帰り給ふべき心もし給はず。

④Aもし世におはすることもこそとて、B言づけ給ふものあるやうに　C聞きし。⑤D御文にはさも書かれざりし。Eいとあてはかに思ひまさられて、聖には、

「しばし、かくてなむ侍るべき」

とて、京に御文ども書きて遣はす。（P274、小P213、巻三【一二】(5)）

そこで、問題とする文④・⑤・⑥のA～E各部分について、〈巻三注釈〉を更に補訂した本稿の解釈を再掲する。

文④：Aもし（吉野姫君が）お生まれになっているのならばと、B（唐后様が吉野聖へ）託しなさっている（姫君の助けになるような）ものがあるように　C（吉野聖から）聞いたなあ。

文⑤：D（私〈＝中納言〉が受け取った唐后の妹姫君宛て）御手紙には、そう書いていなかったが。

文⑥：E（唐后が妹の世話に関わるものを頼むとは言わない態度を、中納言は）たいそう何とはなく奥ゆかしく感じ、自然と思い募らせるようになって、〈「聖には……」以降は、前述の吉野聖、次いで京の母君・義父左大将の夫妻及び大将大君に対する深吉野滞在の延長表明〉

作品本文の問題個所に対する以上の本稿の解釈が、従来の諸注とどのように異なっているかを、大変込み入っているが、〈巻三注釈〉で記した結果との異同も含めて整理しておこう。

《一》唐后か吉野聖がB「言づけ給ふ」相手（吉野聖・吉野姫君・中納言のいずれかの可能性）と時点、及び「言（こと）づけ給ふ」のにも拘わらず、D「御文」には書かれないという該当記事についての解釈。《二》での推定材料

＊本稿・〈巻三注釈〉共通の解釈：

B「言づけ給ふ」相手は吉野聖で、巻一の中納言渡唐よりも以前、度々回想されている聖の渡唐の時点のできごとである。巻三冒頭近くで中納言が最初に訪問した時の吉野聖の説明において、聖が在唐中に唐后から母尼君

宛ての「御消息」を託されるにあたり熱心に「仰せごと」を受けた件、「泣く泣くこの母宮の御ことをのたまはせて、いみじうねむごろに仰せごと侍りて」と略述している件（P265、小P201、巻三【三】）が、巻二末の中納言が唐后から預かって吉野尼君に渡したD「御文」では記されていない内容。

＊新註・旧大系・新編全集：B「言づけ給ふ」相手は中納言とする。

＊全注釈（語注）：新編全集解を紹介しつつ、B「言づけ給ふ」の主語を吉野聖とした上で、「言づけ給ふ」相手を吉野姫君としているように解せる。D「御文」では記されていない内容についてはよくわからないとする。

このうち、D「御文」には書かれないという内容及び該当記事についての解釈については、次章で後述する通り、旧大系・新編全集は吉野姫君のことについての伝言、全注釈は吉野姫君に対して言い伝えておくべき秘密事をそれぞれ推測しながらも、不審とするか（旧大系・全注釈）、あるいはそれぞれ該当する記事とその「言づけ給ふ」時点、及び「聞きし」時点・主語・相手を複雑かつ曖昧に解している（新編全集）のである。

《二》A「もし世におはすることもこそとて」の「もこそ」の解釈（恐れ・心配、または単なる強調、将来をおしはかり期待する意のいずれか）に伴う、「世におはする」の主語（吉野尼君・吉野姫君のいずれか）、B「言づけ給ふもの」の推定内容の違い

＊本稿・〈巻三注釈〉の各解釈：

A「もこそ」を、将来をおしはかり期待する意〝（もし、ひょっとしたら）……しているのならなあ〟（旧大系の訳）と解する。〈巻三注釈〉では「もこそ」を「も」の単なる強調（新註と同じ）としていた。「世におはする」の主語は共に妹の吉野姫君。

B「言づけ給ふもの」の該当内容は、吉野姫君が「世におはする」ことを期待して生活の助けとなる「もの」を

託したと解する。〈巻三注釈〉では同じく吉野姫君が誕生している場合だが、強調しつつ世話を頼んでいると解していた（旧大系の補注における別解）

＊新註：Ａ「もこそ」を単なる強調と解し、母吉野尼君がまだ「世におはする」場合に備えてＢ「言づけ」ている伝言や物と解する。

＊旧大系：Ａ「もこそ」を将来をおしはかり期待する意ととる以外は新註と同様で、更にはＢ「言づけ」た内容は吉野姫君とする見解も提示する。ただし、「もこそ」の意は訳から汲み取れる解釈であり、補注では、Ａ「世におはする」の主語を吉野姫君と取る別解を示した上で、「もこそ」を恐れの意「母尼君にとっては、（愛執のたねとなって）具合のわるいことを予想する意」を推測する。

＊新編全集や全注釈（語注）：Ａ「もこそ」を恐れ・心配の表れととり、「世におはする」の主語を吉野尼君と解した上で、ひどい苦境にあるならいけないと心配だと、妹吉野姫君のこと自体を暗にＢ「言づけ」つまり伝言したものと解する。結果的には吉野姫君のことという点では本稿とやや近い解とも考えられる。

《三》中納言の心情、Ｅ「いとあてはかに思ひまさられて」の具体的内容。「あてはかに（あてはかなり）」のかかる対象（唐后・吉野尼君・中納言のいずれかの可能性）についての解釈（※印は本稿による整理）

＊本稿・〈巻三注釈〉共通の解釈：「あてはかに」の対象は唐后が妹の世話まで頼むとは言わない〝奥ゆかしい〟態度であり、このことから唐后思慕を募らせ、后の母だけでなく妹の今後にも関心を増す中納言の心象である。

＊新註：「姫君に（自然と）艶な好奇心にそそられて」。※「あてはかに」の形容対象は、吉野姫君に対する中納言の心情のさまで、「あてはかに」を「あでやかに」同様に解する。

＊旧大系：「吉野尼君の生活を大変高貴だと一層思いなさって」。※「あてはかに」の形容対象は吉野尼君の生活。

＊新編全集の訳：「そう思って中納言は、なかなか品のいい感じだと吉野姫君への思いが（自然と）募って」。

※「あてはかに」の形容対象は、前部分の唐后の態度に関すること（本稿と同様か）とも、吉野姫君の様子とも受け取れ、文脈が判然としない。

＊全注釈（語注）訳：「吉野姫君に秘めやかな思いを寄せなさって」。※「あてはかに」の形容対象は、吉野姫君に対する中納言の心情のさま（新註と同様）。

＊桜楓：吉野姫君へ関心が向かう文脈を指摘。

以上の通り、解釈の分かれる主な箇所と本稿・〈巻三注釈〉と諸注の解釈の関連を中心にして端的に記したが(6)、それでもわかりにくい異同となっていよう。諸注のうち、本稿の解と全体的に最も近い解としては新編全集のようにも受け取れるが、当該箇所全体における次に示す同書の訳はA・B・Cの各箇所における違い（《一》・《二》前述）があるせいもあり、本稿の解と同一とは解しがたい。

＊新編全集の全体訳：④Aもし母君が世に生きながらえておいでなら、そのままにはできないというので、B唐后の御伝言があるようにC聞いたことは聞いた。⑤Dただお手紙には、姫君を私がお世話するようにともお書きになっていなかったなあ。⑥Eそう思って中納言は、なかなか品のいい感じだと吉野姫君への思いが（自然と）募って…

本稿の解との共通内容として、唐后からは吉野姫君の世話の依頼に関してなされなかったことを中納言が意識する点はあるが、前掲の頭注を含めても前後のつながりが曖昧である。

次章において掲出した箇所の説明を更に加えた上で改めて、本稿における当該箇所の解釈の論拠、及び最終目的とする作品全体における意義を明示し考察を行っていく。

二、聞き手の存在と「もこそ」の文意をめぐる解釈〈検討その一〉

深吉野で中納言が唐后の母尼君との対面を果たした直後、当該場面の心情における検討上の基本的な手がかりは、三点ある。第一には唐后がB「言づけ給ふ」相手とその内容を「聞きし」者との兼ね合い（前章《一》の問題点）の検討、第二にはB「言づけ給ふ」内容を考える上で必要なA「もし世におはするもこそ」・B「言づけ給ふもの」（前章《二》の問題点）の検討、第三には、E「あてはかに思ひまさる」中納言の心情を考える上で必要な「あてはか（なり）」のかかる対象をこの語の用例と当該箇所の前後の文脈から推定する検討（前章《三》の問題点：次章で予定）である。以下、検討をしていこう。

（1）唐后の〈言づけ〉の相手と聞き手の兼ね合いに関する検討

まずは、文意の解釈として第一の確認点から検討に入る。唐后がA「言づけ給ふ」相手とその内容をC「聞きし」者（主語）の兼ね合いだが、「聞きし」の「し」は直接体験の過去「き」であることから「聞きし」者が心情の主中納言自身である可能性は高い。それならば、作品の展開上、吉野尼君・吉野姫君母娘に関する伝言を中納言自身が「聞きし」相手は唐后か吉野聖しかいない。その際に、A「もし世におはすることもこそ」と吉野尼君の存命・吉野姫君の誕生のいずれにせよ仮定して考え、B「言づけ給ふ」のはやはり、直接確かめようのない異国におり、地の文で尊敬語を付される唐后ではないか。吉野聖に尊敬語を付されることは、会話中を除いて見出せない。

「言づく」は、この場合伝言する、または託すの意と解せ、当該箇所の場合は、B「言づけ給ふ」その内容を中納言がC「聞きし」という以上、唐后の発言内容であろう。しかも、妹吉野姫君のことが中納言に対して巻一末近くの

直接の伝言では触れられず、巻二末近くの母吉野尼君宛て唐后の手紙で初めて知り、「妹の君おはしますなる」と推定するいきさつは明らかである。確かに、作中例においては、唐后が巻一末近くで中納言へ母尼君の手紙を託すことについても用いられているが、やはり巻一在唐時にのみ可能な唐后から中納言への伝言とは解しがたい。渡唐したわずかな者で中納言へ唐后からの伝言を伝え得る者つまりは吉野聖へ「言づけ給ふ」伝言なのである。

ここで改めて、前章の《一》で提示したA「言づけ給ふ」相手の結論と諸注の違いに加えて、C「聞きし」者に関する諸説整理の補足を示しておこう。

《一》C「聞きし」者・A「言づけ給ふ」相手の各解釈

＊新註・旧大系・新編全集：C「聞きし」者を中納言自身と解すが（本稿の解）、前章の《一》本体で記した、A「言づけ給ふ」相手と同一とする。

＊全注釈（語注）：C「聞きし」者を中納言自身と解し、A「言づけ給ふ」主語を吉野聖とした上でA「言づけ給ふ」相手を吉野姫君としているように解せる。

実は、旧大系は「聞きし」・「言づけ給ふ」を同時の出来事とした訳を行い、新編全集・全注釈は時間的な間隔を置いて中納言が以前唐后から「聞きし」ことを後から思い起こした内容として説明しているのである。次に掲出する。

＊旧大系（頭注）：私（中納言）にたのんで言いおくりなさるものがあるように聞いたなあ。〈本稿注記：訳文中の傍点は本稿によるもの、なお補注では、「ことづけ給ふもの」における「もの」について後述の通り不審とする〉

＊新編全集（頭注）：〈中納言は、〉母君に唐后の異父妹がいるのは帰国後、母君宛て消息を開いて知ったので、そう思って考えると、別離の折にその姫君のことを伝言されたように聞いた、の意か。

＊全注釈（語注）：ここでは、先にあった、聖から託された手紙を伝えることで、あるいはその文面のなかでとく

に異父妹に対して言い伝えておくべき秘密事があったのかも知れない。また、「あるやうに聞きし」というのがよくわからない。

ただし、これらの訳や説明には矛盾が生じているのではないか。旧大系の訳においては、唐后が〝私（中納言）にたのんで言いおく〟る時点も、その伝言を私（中納言）がC「聞きし」時点も、巻一末近くの帰国前に母宛ての手紙を託された対面時（P209～211、小P113～115、巻一【三八】）に該当しないことになる。また、新編全集の説明においては、巻一末近くで吉野姫君に関わる伝言が皆無にもかかわらず、その時に吉野姫君についてC「聞きし」伝言内容に、巻二末近くの唐后の手紙―母吉野尼君宛てで吉野姫君の誕生に初めて触れたもの―を読んでから〈気付いた〉ことになり、矛盾する。また、全注釈においても同じく巻二末近くの時点に開封した唐后の手紙を中納言が読んだことをC「聞きし」と表しているとは解し難く、また後続文⑤のD「御文にはさも書かれざりし」とも矛盾する。

やはり、唐后が中納言の渡唐以前に、吉野聖へB「言つけ給ふ」内容について、中納言がこの吉野山初訪問時に吉野聖から直接C「聞きし」いきさつと見るのが適切ではないか。

ただし、B「言つけ給ふもの」の内容については、更なる検討が必要となる。

(2)「もこそ」により表される唐后の心情と「言づけ給ふもの」の内容に関する検討

第二の確認点、唐后がB「言づけ給ふもの」の内容を考える上で、A「もし世におはするもこそ」、更にはB「言づけ給ふもの」の各解釈について検討に移ろう。

当該箇所の「もこそ」の場合は、「もし」と共に用いて将来を期待する意〝（もしひょっとして）……あろうのならば（なあ）〟が最も適切であろう。これは、旧大系の訳（ただし「もこそ」部分のみ）に従ったもので、この当該箇所例及

び旧大系の訳を福田益和氏が引いて「もし」との呼応の文型での意として指摘している(7)。『浜松』の当該箇所例の場合は、最も似た文型・表現として、『讃岐典侍日記』で堀河天皇の臨終に際しなおも蘇生して言葉を発するのを願えるうちはよかったと作者が同僚の女官をなだめる言葉「ひとことともこそ、もしやと、思ひつるほどこそありけれ」（P424）(8)や『とりかへばや物語』巻三で男装に戻った今大将の訪れを、入れ替わる前の女大将の〈北の方〉だった右大臣四の君側が心待ちにする心情「かの殿にも、『もしたち寄りたまふやうもこそあれ』と手づから立ち居しつらひ女房ひきつくろひなどしたまふを」（P407）がやや後代の例ながらあげられる。

一般的に助詞の連語「もこそ」は、恐れ・心配の意〝……したら心配だ〟が『源氏物語』などにおいて多いものの、一方では単なる強調、また更には本作品における当該箇所の場合と同じく、良い将来をおしはかる意の用例が和歌などに前述の通り存在している(9)。本作品における他の作中「もこそ」例の場合、三例は望ましい事態についての強調（詠嘆や意志、願望を含む）の意、一例のみが恐れ・心配の意と明確に解せる良くない事柄と解せるので、〈巻三注釈〉での結論では新註の解と同様に単なる強調としていた(10)。しかし、本稿においては、「もし」を伴うことで期待の意が明確になると解した。福田論文では、期待の意を持つ「もし……もこそ」の用例として当該箇所や『今昔物語集』二例を掲げた他、同様に解せる類似の文型として「もし……もや」の例も指摘し、本作品の巻二末近くの唐后の母宛て手紙で妹吉野姫君の誕生に触れた例「男にものし給はましかば、もしこの世に渡り給ふともやと、待ち侍りなましを」（P260、小P190）や『夜の寝覚』二例も掲出している。当該箇所の例と同様の将来への推測の意に解せる。

そこで、当該箇所において諸注で示す「もこそ」の対象となる具体的な内容を検証した場合、新編全集や全注釈（語注）の解〝母吉野尼君がひどい苦境にあるならいけないと心配だ〟においては、〝ひどい苦境に〟を補った上で

〈よくない内容〉にしており、適当ではないと考えられる。当該箇所「世におはする」においては、仮に主語を唐后の母吉野尼君に解した場合は彼女の存命であり、恐れ・心配の意には解しがたい。

この時点で、「もし世におはするもこそ」は、母吉野尼君が存命であったら、の意（旧大系の訳）または、異父妹吉野姫君が誕生していたら、の意のいずれかになるが、後者の妹吉野姫君の誕生とした方が適切であろう。というのも、直後のD「御文にはさも書かれざりし」、つまり存命であるかもしれない母吉野尼君に宛てた手紙に記していなかったとする内容がわかりづらいためである。しかも、直前の文脈においては、一章で紹介した当該箇所における文①・②とも、「身をなげきに思したる人」おそらく吉野尼君の出家に適した深吉野であっても、「若からむ人」若い吉野姫君が暮らすのを案じている。続く文③の引用文波線部「ただ人一人の御ゆかり」も、吉野尼君に加え吉野姫君を新たに意識したものといえ、当該箇所の心情も吉野姫君へ関心が向かう文脈（桜楓の指摘）上にあろう。それに、唐后が吉野聖から近況を知らされた母吉野尼君の存命[11]よりも、同じ時点で初めて聞かされて知った異父妹吉野姫君の誕生と解する方が適切なのではないか。

こうして、吉野姫君の誕生があるならばと期待して唐后が行った内容を考える上では、更に、「言づけ給ふもの」という表現についても、検証が必要であろう。本稿では「もの」を（依頼の）事柄と解釈するのは無理があると考え、〝生活の助けとなるもの〟具体的には金品の類と解した。「言づけ給ふもの」の内容を、〈巻三注釈〉では〝吉野姫君の世話を頼むこと〟と解したが、旧大系が補注で指摘する通り、吉野姫君という人物について「もの」と表現するのは不審である。ただし、金品を託す相手の吉野聖に世話を頼むという意味合いでは、やはり実質的には同様の意味合いなのではないか。この吉野聖とは、唐后と母吉野尼君にとってどのような間柄の人物か。吉野聖は、中納言よりも前に渡唐した渡航僧で（P165、小P48、巻一【八】）、唐后に母の存命・出家を妹の誕生と共に知らせ、帰国の際は唐后

から母宛てのいわば〈初信〉を言付かって渡してもいた（P209～210、小P114、巻一【三八】）。聖の話によれば、元来、母尼君の父上野宮の代からの知己であり、唐后からの〈初信〉を渡したことで、尼君が現在の隠遁地深吉野への移住を共に行うまでに「いとど頼み思いたる」人物である（以上P267～268、小P204、巻三【五】）。唐后は、このように尼君の長年の知己である吉野聖には妹の世話に必要な金品を託したのに比べ、中納言に託した母宛ての手紙では妹の存在に触れるに留めて、渡唐時の聖に託したような金品はもちろんのこと、こうした生活の世話に関する内容については「書かれざりし」状態だった。このことに、当該箇所において中納言は思い当たったのであろう。

もっとも、唐后が吉野姫君の助けになるような「もの」を吉野聖に「言づけ給ふ」という対応内容は、作中で明確に記す物が見出せないのも確かである。本稿において前節で対応内容として想定している、巻三冒頭近くで中納言が最初に訪問した時の吉野聖の説明、聖が在唐中に唐后から母尼君宛ての「御消息」を託されるにあたり熱心に「仰せごと」を受けたと回想している件にしても、前掲「泣く泣くこの母宮の御ことをのたまはせて」とあるだけで、吉野姫君に関しては実際のところ、手紙を取り次ぐにあたって出生のいきさつを中納言に明かしているのみである。

しかし、当該箇所の「もの」が明確に記されないということは、別の見方をするならば（触れられて当然の形見などではなく）、殊更に記すのが無粋なため朧化されやすい金品の類の可能性は高いのではないか(12)。

以上、第一・第二の確認点の検討から言えるのは、当該箇所の前掲の文④において「言づけ給ふ」のは貴人の唐后から、吉野聖―中納言が唐后以外にこの秘事を聞くことのできた唯一の人物―へなされたものであり、託された「もの」の内容は、妹吉野姫君の今後に必要だが朧化されやすい金品の類として推測できるであろう。その内容は文⑤「御文には書かれざりし」。つまり、中納言が巻一末近く帰国する際に託され、巻二末近くに開封して読んだ唐后の母吉野尼君宛の手紙では、次章で後掲の通り母に「よろづを頼み思し召せ」と中納言を頼るよう強く勧めている（P259

～260、小P188～190）に対して、吉野姫君のことは、渡唐時の吉野聖から知った感慨を記しているのみであることと解せる。具体的な該当内容が明確でないにせよ、唐后が中納言に対して、母吉野尼君の世話は頼んでも妹姫君の世話を頼もうとはしないでいるこの態度こそが、中納言が「あてはかに思ひまさられて」いる心情の意味合いではないか。

そこで次章で、文脈の意味合いを確定する上で、第三の確認点「あてはかに思ひまさられて」における「あてはかに（あてはかなり）」の意味合い・対象の検討に移ると共に、作品全体から読み解いていく。

三、「あてはかに思ひまさる」中納言の心情〈検討その二〉

第三の確認点、「あてはかに思ひまさられて」における「あてはか（なり）」は、上品なさま、奥ゆかしいさまの意で、平安時代の散文作品の用例はそれほど多くない[13]。類義語「あて（なり）」「あてやか（なり）」よりも更に下位の上品さ、身分の高くない人物に対して用いられるいわゆる二級の美の形容とする見方[14]も提示されている一方で、「あてやか（なり）」と流行的な交代による推移する語とする見方[15]が示され、説が分かれている。果たして、本稿のように当該箇所の「あてはか（なり）」が、上流女性唐后の言動に関する奥ゆかしさとして解せる可能性はあるだろうか。

本作品全三例のうち当該例以外の二例は巻二の添い臥しの大弐女の様子と巻三（当該箇所より少し後）の吉野尼君の住まいに対して用いられている。

添い臥しの大弐女の様子を表した例「にほひありさま、いとあてはかに、かうばしう」（P228、小P144、巻二）は、同じく大弐女への「あてやか」使用二例、更には形容「あてなり」例における上流階級の人物への使用傾向を考え合わせれば、中流階級の女性への形容として使い分けた可能性もあるいは考えられる（「あてなり」使用人物の内訳は中納

言〈一例〉、大将大君〈二例〉、大君の妹である大将中の君〈一例〉、唐后〈二例〉、異父妹で帥宮を父に持つ吉野姫君〈三例〉、吉野姫君の異母姉である衛門督北の方〈一例〉。ただし一方で、こちらも「あてなり」よりも劣る美とされる「あてやか（なり）」は、これらの上流の人物、大将大君や衛門督北の方にも使用されている。）

ただ、大弐女の「あてはか（なり）」用例は、少なくとも「あてやか（なり）」用例と比較した場合、「あてはか（なり）」が暗闇における芳香主体の漠然とした雰囲気を表しているのに対し、「あてやか（なり）」が人物に対する直接的な視覚情報が主の美を表している違いがあることであろう。同じく大弐女に対する形容であっても、前掲の「あてはか（なり）」例は閨で添い臥しする雰囲気を表したものであり、明くる夜明け後の外光で見た「いと若うあえかにそびえて、あてやかにをかしげにて」（P230、小P145、巻二）、大弐女が上京し人妻となった後に密会を重ねた時点に後朝で月の光で見た容貌「ありあけの月影に、例のいとあてやかになつかしくなまめいたるを」（巻五－P397、小P390）とは明らかに異なる。

このように、人物の直接的な様子ではなく漠然とした雰囲気を表す点においては、もう一例、吉野尼君の住まいに対する「あてはか（なり）」用例も共通しているといえよう。「朽木形の几帳の帷子（かたびら）」という視覚的な様子は交えられているが、やはり専ら芳香により住まい全体について推し測られる漠然とした〈上品さ〉であろう。訪問した中納言が受ける感銘で、「御簾の内」からの薫物の香と「仏の御前の名香（みやうがう）の匂ひも、ひとへに合ひて、さすがにあてはかなる内の気色も、思ひやりあはれなり。」（P276、小P215、巻三【一四】）というのである。その際、皇族出身の吉野尼君の高貴さもやはり相まったものであろう。

本稿で問題にしている当該箇所も、身分というよりも人物の漠然とした様子または事柄についての雰囲気を表す形容の可能性は高いであろう。他作品の用例においては、『伊勢物語』第十六段「人がらは心うつくしく、あてはかな

ること好みて」（P128）の紀有常の例も、〈風雅なこと〉といった漠然とした意味合いを表している[16]。もちろん、本作品において一方の「あてやか（なり）」作中全五例のうち、帰国後の再会時における大将大君一例では触覚による情報「御手あたり、ありさま」に対する場合（巻二P244、小P166～167）、また帥宮北方二例（大弐女二例・大将大君一例以外）では垣間見による場合もあれば視覚情報に拠らない声の雰囲気「忍びやかにのたまふなるけはひ」に対する場合（巻三―小P253）もあるが、「あてはか（なり）」が本作品において「あてやか（なり）」よりも漠然とした対象・感覚を表している可能性を妨げるものではなかろう。

しかも、当該箇所の「あてはか（なり）」の場合は、〈……に思ふ〉の表現形式により、主人公中納言の心情を主に表す点で、人物の美を直接表す他の例とは異なる。人物における心の動きのありさまとして直接形容した用例は他になく[17]、類似の表現例としては、『源氏物語』篝火巻の玉鬘の髪の感触に魅了される光源氏の心情のみである。触覚情報ではあるが、やはり直前の対象（人物というより一部分）である（「女の御さま見るにかひあり。御髪の手当たりなど、いと冷ややかにあてはかなる心地して」〈三巻P257〉）。やはり、当該箇所では、直前の文脈、吉野姫君について中納言には頼もうとしない唐后の態度に対する漠然とした心情と見て差し支えなかろう。

以上の検証結果から得た当該箇所の解釈の内容を前後の文脈に即して確認してみよう。

当該箇所の前半たる直前の部分を妹の世話に関する唐后の態度（中納言の感慨）としてこれまで検討してきたが、後続の部分は吉野滞在の延長を決める中納言の言動である。この文脈は、中納言には妹の世話を頼むことをしない唐后の姿勢が逆に中納言の心情において積極的に世話をする心情を呼び起こす流れと捉えられるのではないか。しかも注目されるのは、当該箇所より前の部分で中納言が吉野姫君と母尼君との同居を吉野聖へ問うに至る心情、つまり尼君が吉野聖を「頼もし人にて、過ぐし給ひにけるにこそは」と中納言は実感して「いみじうあはれにて」と反応した

ことである。本来は頼るはずのない隠遁者の吉野聖を吉野尼君が「頼もし人」とするのがやむを得ない厳しい実情を感ずるゆえの心情と解せよう。その延長で、唐后からして妹吉野姫君の生活の世話に関しても、同じく吉野聖に金品を「言つけ給ふ」ことにより頼っていると「聞きし」事情を当該箇所で思い起こしていると解せよう。

その際、「あてはかに思ひまさる[18]」は、唐后の姿勢を漠然と奥ゆかしいと感じて募る恋心ゆえに、〈巻三注釈〉で記した通り、わび住まいする母吉野尼君ばかりか、異父妹の姫君に対しても、恋しい唐后という「ただ人一人の御ゆかり」（一章引用文の文③波線部）として関心を高める一連の過程であろう。吉野姫君への恋心（新編全集解）というよりは、この段階では関心を本格的に持ち始める端緒と考えられる。主人公が外的な必然性がない状況を意識することをきっかけにして、満たされない唐后への思慕から彼女のかけがえのない〈ゆかり〉として母吉野尼君ばかりか妹吉野姫君への援助を実行するいきさつなのである。

結論に代えて―当該箇所の作品全体における意義と今後の見通し・課題―

本稿の検討から、当該箇所全体の文脈を、作品全体の流れと関わらせながら考えてみよう。これまで考察した通り、唐后が妹吉野姫君の世話を中納言に対し頼んでいなかったことが、却って満たされない想いを抱く中納言に唐后を「あてはかに」思う気持ちを募らせ、深吉野で母尼君だけでなく妹姫君も含めた世話を行うに至る。この後の展開では、邸宅の修復や物資の援助を行う中にも、卯月の更衣の贈り物では若い姫君のための装束や日常の慰めとなる絵物語を入れる気遣いを見せるなどしていくのである（P285～287、小P229～232、巻三【一二】・【一三】）。

この展開を、前述の母吉野尼君を援助するに至るいきさつと比べると、決定的に異なる点がある。それは、中納言に予め示される宿縁の必然性の有無である。母尼君への援助の必然性は、この現存巻一以前の散逸首巻当初から描か

れていた中納言の父宮転生をめぐる〈親子〉の宿縁にあった。唐后は、母吉野尼君宛ての手紙で、手紙を持参する中納言を紹介するに当たり、前世の因縁を明かしている。「おのれが持ち奉りて侍る皇子の、前の世の御子にておはしましけるなり」と明かした上で、先にも記した通り頼りにするよう勧めている。

「この中納言、宮（＝三の皇子）を世の常ならず、いみじう思ひきこえさせ給へるゆかりに、ゆめゆめおろかには侍らじ、よしなうなど思し疑はず、おのが身を代へて渡りたると思しなして、よろづを頼み思し召せ。（以上はP259～260、小P188～190、巻二）

唐后が母に明かしている、わが子三の皇子への中納言の父宮転生は、散逸首巻で転生の夢告などが行われたことで中納言が渡唐に踏み切り（『無名草子』に拠る推定記事）、現存巻一始めに「面変わりせぬ親」三の皇子との〈再会〉が実現した。こうした転生の事をこの〈再会〉直後に、三の皇子〈転生した本人〉の口から母である唐后は知らされ、強い親しみを覚えている。告げを受けての物忌み先で思わぬ逢瀬を持った際も、宿縁を感じていたのである。帰国直前の中納言に母宛ての手紙を託したのは、逢瀬の相手により、日本人の渡唐が稀な状況下に母へ手紙を届けてもらう貴重な機会というだけではなく、こうした転生による〈親子〉の縁に基づく孝養の必然性によるものとして読み取れる。しかし、予言に導かれた、母吉野尼君と中納言とのこうした〈親子〉の宿縁のような必然性が、妹吉野姫君に関する場合においては見出せないのである。宿世の予言または唐后からの依頼の必然性がなくてむしろ「あてはかに」感じることで募る唐后思慕の本質が窺えよう。

もっとも、当該箇所の少し後、中納言が来訪し援助を寄せる直前に吉野尼君が受けたとする吉野姫君の将来に関わる夢告（P283、小P226、巻三【二〇】）は、中納言に援助させる必然性として論じられている(19)。ただし、〈巻三注釈〉の掲載担当区分にも記した通り、この夢告にしても、実質的には援助が始まった後の場面において出家者吉野尼君に

対し、自分だけでなく娘の吉野姫君への援助も仏教論理に基づく必然性があると納得させる、いわば主人公の欲求・言動に対する後付けの正当化の役割が専ら見出せよう。しかも、その正当化には、中納言の父宮転生から渡唐による〈父子再会〉、その母后唐后と中納言の一夜の逢瀬が元来、実現段階において、母吉野尼君に対する后の孝養の志から発した宿縁を取り込む形での合流が考えられる。検討すべき解釈の問題も多いため、稿を改めて今後の検討課題としたい。

注

(1) 構想の変化については、池田利夫「浜松中納言物語の構成と構想」(『更級日記　浜松中納言物語攷』武蔵野書院　一九七〇年初出)、宿世の予言による主人公の言動の規定については、伊井春樹「吉野の姫君の運命—浜松中納言物語の構想に関連して—」「浜松中納言物語の方法」(共に『源氏物語論考』風間書房　一九七八年初出)

(2) 神田龍身「『浜松中納言物語』幻視行」〈文芸と批評5-5、一九八〇年一二月〉

(3) 浜松中納言物語の会巻三分会「『浜松中納言物語』巻三注釈」(日本文藝研究71-1〜：当該箇所は71-2、二〇一九年一〇月〜連載中)。なお、本稿が依拠している巻一の本文と注釈内容は、浜松中納言物語の会『浜松中納言物語巻一注釈』(私家版、二〇一二年)である。また、巻二の内容については、同じく巻二注釈会で共同作業中の注釈を参考としている。

(4) 『浜松中納言物語』諸注について、本稿における使用略称と正式な書誌は次の通り。
・新註＝宮下清計校注『浜松中納言物語』新註国文学叢書(大日本雄弁会講談社、一九五一年)
・旧大系＝松尾聡校注『浜松中納言物語』日本古典文学大系(岩波書店、一九六四年)
・桜楓＝久下晴康(裕利)編『浜松中納言物語』(桜楓社〈おうふう〉、一九八八年)
・新編全集＝池田利夫校注訳『浜松中納言物語』新編日本古典文学全集(小学館、二〇〇一年)
・全注釈＝中西健治『浜松中納言物語全注釈』(和泉書院、二〇〇五年)

(5) 『浜松中納言物語』の本文引用は、巻三に関しては注(3)前掲の浜松中納言物語の会巻三分会の〈巻三注釈〉本文、巻一に関しては浜松中納言物語の会『浜松中納言物語巻一注釈』(私家版、二〇一二年)、他の巻は注(4)前掲の松尾注(4)校注書本

文（P…）に拠りつつ表記を改め、注(4)前掲の池田校注訳書の対応頁（略称：小P…）も記した。巻一・巻三の引用に関しては、前掲書・雑誌稿の各巻の区分番号も併記している。

(6) これらの部分以外にも、「思ひまさられて」の「れ（る）」（自発・尊敬のいずれかの可能性）を自発（新註・新編全集）、尊敬（旧大系・全注釈の語注）の解釈の分かれがあるが、当該箇所の場合は自発の意と解せよう。注(18)で後述の「思ひまさる」「思しまさる」作中全六例のうち当該例以外の三例も自発「る」を伴う意と見なせる。〈巻三注釈〉にも記した通り、「る」は心情をひき起こす自発であり、中納言への敬意は文末の尊敬語「遣はす」一語で表しているのであろう。

(7) 「解釈文法の立場より：「もぞ」・「もこそ」についての私見」（語文研究〈九州大学〉31・32、一九七一年一〇月）。ただし、当該箇所全体の解釈については、旧大系の解釈に沿って〝吉野尼君が存命のこともあろうとて、私（中納言）にたのんで言いおくりなさるものがあるように聞いたなあ〟と解する。なお、日本国語大辞典（初版・第二版・Japan Knowledge版共）「もこそ」項における語義〝……かもしれない〟を掲出しており、期待の意も含むものであろう。同辞典では、心配・恐れの意と同じ語義に列記した上で、掲出した『和泉式部日記』の和歌「折すぎてさてもこそやめ　さみだれて今宵あやめの根をやかけまし」や『平家物語』の例に関し、語誌で、恐れ・心配だけでなく「将来を期待する場合もある」と説明する。小学館古語大辞典では心配・恐れと強調の両意を掲出し、角川古語大辞典では「もこそ」立項や「こそ」項での言及がなく、「もぞ」項で強調と心配・恐れの両意を掲出する。

(8) 以下、『浜松中納言物語』以外の平安時代の作品本文引用は、Japan Knowledge及び各作品の索引を手がかりに新編日本古典文学全集の各作品本文を使用。

(9) 伊牟田経久「『もぞ』『もこそ』考」（国語〈東京教育大学〉6-2、一九五七年九月）における、本居宣長の論述を受けての分類と用例の指摘。

(10) 「もこそ」の作中全五例のうち当該箇所以外の例は、中納言が、打ち解けない吉野姫君に深吉野への来訪の誠意を伝える言葉「常よりもわりなき細道をそぼちつつ、御迎へにまいり来つるを、これより深くもと、物憂げなる御気色に侍るとか。これより深くたづね入る心ざしもこそ」（P357、小P329、巻四）、吉野姫君に対し中納言が後見役を務め通すと強調する言葉「うれしくあはれなるふしに、この世ならでも思ひ出らるべうもこそ侍れ」（P426、小P431、巻五）がある。他は一例がその直後、吉野姫君が中納言の遁世の絆となる、良し悪しの両説ある事態についての強調の意（P426、小P432、巻

五）、一例のみが望ましくない死別への恐れ・心配の意（P415、小P416、巻五）である。

(11) ただし一方で「世におはす」の作中例を重視する場合は吉野尼君の存命の解を取り得る。「世にもおはしまさずなりにけるにやと、悲しういみじうなむ。」（P259、小P189、巻二）、「その人はまだ世にやおはする」（P265、小P201、巻三【二】）の例がある。しかし、やはり吉野姫君に関する直前の文脈に従うべきであり、「もののたぐひ（＝唐后自身のきょうだいの吉野姫君）のおはしますなるやうに」（P259、小P189、巻二）の類例と解せる。

(12) 中納言が、当該箇所の後になってから従者に京へ取りに遣わして吉野尼君へ贈った「もの」の中には、唐后から手紙とともに託されたと思しき「唐国（からくに）より奉り給へりける物ども」も含まれているが（P277、小P217、巻三【一五】）、実際に預かったはずの巻一末近くの前述場面にはやはり記されていないでいる。

(13) 平安時代の散文作品の「あてはか（なり）」用例は、現時点で管見に入った限りでは、本作品三例の他に『伊勢物語』一例、『うつほ物語』二例、『落窪物語』一例、『蜻蛉日記』一例、『源氏物語』十三例、『夜の寝覚』一例、『とりかへばや物語』二例のみである。此島注(15)論文の調査結果に加え、『とりかへばや物語』の用例を確認した。また、此島注(15)論文では中世以降の使用例が見受けられないと指摘する。

(14) 伊牟田経久「『あてやかなり』と『あてはかなり』」（広島女子大学紀要第1部人文・社会科学1、一九六六年三月）を承けた『岩波古語辞典』の「あてやかなり」「あてはかなり」項の記述。『日本国語大辞典第二版』「あてはかなり」項の語誌でも、『源氏物語』の使用傾向として、地方出身・滞在の人物に意外にも見出される品位のさまを指摘する。なお、『角川古語大辞典』や『古語大鑑』は「あてやか」と同義とする。

(15) 此島正年「『あてはか』『あてやか』考―源氏物語を中心として―」（国学院雑誌88-1、一九八七年一月）では「あてはかなり」の流行的な『優雅』な語」という仮説を提示し、伊牟田注(14)論文が「あてやか（なり）」よりも更に品位が劣るとするのに異議を唱える。

(16) 他作品における「あてやか（なり）」「あてはか（なり）」の使い分けについては検証できていないが、『源氏物語』作中例の中にも、夕霧巻の一条御息所の住まいの様子として、「はかなき小柴垣もゆゑあるさまにしなして、かりそめなれどあてはかに住まひなしたまへる」（四巻P398）がある。

(17) 主人公の振るまいを表した例はやや後代の例『とりかへばや物語』巻一における〈妻〉四の君に対する女中納言の穏やか

な看病ぶり「あてはかに見扱ひたまふにつけても」（P209）がある。

(18) 「思ひまさる」「思しまさる」作中全六例（うち「思しまさる」は一例）の内実は、様々な登場人物がその時々の相手に対し様々な思いを募らせるもので一定しない。当該箇所以外の五例における「思ひまさる」内容は、唐帝が、蜀山から河陽県の離宮へ戻って来た唐后を寵愛すること、中納言が大弐女との密通で連れ出すことを思い留まる分別、中納言の義父左大将が中納言を子として睦まじく思うこと、中納言が打ち解けてきた時点の吉野姫君に心慰められる存在として大切に思うこと、現式部卿宮に盗み出されて契った後に中納言と再会した吉野姫君が中納言に顔向けできないと思うこと、である。他に吉野尼君が娘唐后と再会したい「もの思ひ」が「まさる」と語った一例がある。

(19) 伊井注(1)論文

（まつうら　あゆみ・関西学院大学文学部非常勤講師・京都女子大学非常勤講師）